エイト

4th
2012春

宝来館〈釜石市〉

震災後、津波による打撃的被害から復活。2012年1月5日、見事営業再開を果たす。白砂青松の美しい根浜海岸を望める絶好のロケーションと、三陸海岸の新鮮な魚介類を使った料理が自慢の宿。

■宝来館　http://houraikan.jp/

表紙／2011年12月、岩手県釜石市「宝来館」にて。復旧に向けて工事が始まった。「絶望的な環境の中での奇跡の復活への第一歩に立ち会えました。そして撮り続けて来た笑顔がとっても温和になった気がする」
〈バックアップセンタージャパン「活動報告」より〉
Photo by Junichi Takahashi

P2~3／宝来館女将に写真を届けるたかはしさん。「このとき初めて、いろいろ女将さんとお話が出来ました」と語る。震災後、出会ってから9ヶ月が経った。
撮影：長尾彰

巻頭特集

未来につな

【特集Ⅰ】バックアップセンタージャパン アルバムプロジェクト
【特集Ⅱ】— 縁〈ENISHI〉— 東日本大震災 仏像奉納プロジェクト

2011年3月11日に発生した東日本大震災。あれから1年。
自分にはいま何ができるのか、
問い続けてきたという人は少なくないだろう。
アートや表現に関わる者も、それは同じだ。
それぞれの立場からできることを模索し、未来につなごうと動きだした、
ふたつのプロジェクトを取り上げる。

神田ぶどう園〈陸前高田市〉

全国でも大人気の岩手の地サイダーをはじめ数々の自社商品を販売。津波をかぶり棚ごと倒された樹もあったが、家族で力を合わせ、見事復活を遂げた。〈YELL NIPPON ホームページより〉

■神田ぶどう園
http://www.yell-nippon.net/interview03/

Photo by Junichi Takahashi

特集 I

バックアップセンタージャパン アルバムプロジェクト

復旧工事が始まった旅館の前でほほえむ女将。芽吹き、房をつけはじめたぶどう園に立つ夫婦。家の前で柔らかな表情を見せる家族3人。バックアップセンタージャパンが行う「アルバムプロジェクト」は、新しいアルバムとともに1ページ目となる「家族の肖像」を撮影し、届ける活動だ。現在、宮城、岩手に暮らす34家族を撮り、一緒に彼らの復興の記録＝アルバムを作っているという。

写真家であり、バックアップセンタージャパンの代表・たかはしじゅんいちさんは震災直後、被災地に一刻も早く物資を届けたいという思いで動きはじめた。出身地である新潟に仕分けセンターをつくり、被災地のニーズに応じて物資を収集、仕分けし、届けるコーディネートを行った。その後、被災地に何度か足を運ぶなかで「瓦礫のなかで生存者捜索をしている自衛隊の人たちが、もしその家の人が生きていた場合、家に

ビン詰めまで完了した段階で津波に飲み込まれたが、奇跡的に見つかった。新製品しそあかね。Photo by Junichi Takahashi

一時は再建を諦めそうになった畑で、ぶどうが芽吹き実が育っている。
Photo by Junichi Takahashi

ヤマタ商店 〈陸前高田市〉

陸前高田の広田湾で、牡蠣の養殖・ホタテの販売を行っていた千葉さんとご家族。千葉さんの育てた牡蠣は濃厚な甘さで、大きさ品質とも高い評価を受けていた。

〈YELL NIPPON ホームページより〉

■ヤマタ商店
http://www.yell-nippon.net/interview08/

Photo by Junichi Takahashi

戻ってくるからと、家の前に思い出の品を積んでいるのを見た」ことが、このアルバム・プロジェクトに取り組むきっかけになった。

「瓦礫の前に積んであるアルバムやら、思い出の品々を見て、あーそっかアルバムか、思い出が人の助けになるのかと思った。その時に写真での支援もけっこう早い段階から出来そうだなと思ったんです」。

「誰にでも、大切にしているからこそ頑張れる『思い出』がある。家族との新しい『思い出』を1ページずつ増やしていくことで、『元気』や『やる気』をそっと後押ししたい」というたかはしさん。

「僕は、3・11の後に、思い出を積んでいってあげたい。思い出を『過去』というよりは『未来』につないで行きたいんです」。だから、アルバムを届けた後も毎月1回、撮影は続く。

「写真を撮っておしまいじゃなくて、『関わる』ってことをやりたいなと思った。行くたびに撮ってアルバムに挟んでもらって、5年なら5年で1冊のアルバムを一緒に作っていってくれないかなと」。そして、

自宅と加工場は津波に流され、今も仮設住宅に暮らす。
Photo by Junichi Takahashi

YELL NIPPON
http://www.yell-nippon.net/
東日本大震災で被災した生産者の情報を発信、経済活動支援を行っているサイト。本特集で取り上げた「神田ぶどう園」、「ヤマタ商店」の情報も掲載されている。商品も購入可能。

湊水産（みなと）（石巻市）

宮城県石巻市で、化学調味料や着色料をいっさい使わない「たらこ」にこだわり続け、30年。看板商品は、ショッピングサイト楽天市場のたらこランキングにて上位入選の常連となっている。

■愛情たらこのみなと〈湊水産〉
http://www.rakuten.ne.jp/gold/minato-s/

たかはしさんからアルバムをうけとった湊水産社長夫婦。震災後、たかはしさんが自ら支援物資を送り届けた先のひとつがこの湊水産だった。
Photo by Junichi Takahashi

その試みは、少しずつ、かたちになりつつある。

2012年2月、石巻でのこと。

「3・11より80人以上の被災した方々を受け入れ助け合い、解雇者を出さず、必死で復興を目指す石巻愛情たらこの〝湊水産〟社長夫婦の銀婚式の撮影！　やっとメイクをし、やっとドレスアップしてカメラの前に立つ事が出来た2人♪　余りに忙し過ぎて、自分たちの事は全て後回しにして来たお二人が、娘の成人式風撮影って事で自分たちもと…。やっと腰を上げてくれた。『昨日は嬉しくてよく眠れなかった(笑)』って言う奥様の言葉が全て…。立ち会えて良かった♪」（バックアップセンタージャパンのホームページ「活動報告」より）。

銀婚式も、成人式風撮影会も、たかはしさんが撮りに訪れたからこそ、生まれた時間だろう。関わることで、一緒に、新たな「思い出」をつくりだす。お2人のこれからの思い出には、きっと「たかはしさん」も、登場していくにちがいない。

（編集部・井尻貴子）

上／全国から寄せられた応援メッセージを手にする、湊水産スタッフのみなさん。
右／ひとつひとつ丁寧に、職人さんたちが手漬けで製造している、愛情いっぱいのたらこ。
Photo by Junichi Takahashi

バックアップセンタージャパン 主な支援活動

バックアップセンタージャパンでは、アルバムプロジェクトの他にも様々な支援活動を行っています。

Photo by Junichi Takahashi

ふれあいプロジェクト

仮設住宅や被災した人が集まる場所ならどこでも、大道芸、音楽、読み聞かせ、スポーツ教室、各種のワークショップなどを通じて「元気」を届けます。その分野のプロフェッショナルとともに、同じ空気を吸って、体を動かし、心を弾ませつつ、被災された皆さんと一緒に希望のたねをまき、またそこに集まる事で被災地自体にコミュニティが生まれてくれたらという活動です。

みどりプロジェクト

Photo by Junichi Takahashi

緑には人をいやす力があると言われます。花は人の笑顔を誘います。仮設住宅や学校に花を植え、その世話をすることで、心の潤い成分を少しでも補ってほしい、という新潟の花農家や運送屋さんの協力で、被災地の皆さんと一緒に花と緑を育てるプロジェクトです。

写真で報告プロジェクト

撮影：木村和弘

被災地の復興は、まだ緒についたばかりです。復興には長い時間がかかります。しかし、当事者でないと、その記憶はどんどん風化していきます。そこで、被災地の復興の足跡を収めた写真で被災地写真報告会を開催します。全国各地、世界各国で開催し、記憶の風化をふせぎ、支援の輪を広げていきます。

バックアップセンタージャパンの支援活動金のご案内

バックアップセンタージャパンでは、被災地に継続的な支援活動を行って行くため、皆様のあたたかいご支援・ご協力をお願いしております。

Backup Center Japan

- 振込口座 …… 三井住友銀行（0009）新潟支店（007）　普通）7167519
  口 座 名 …… 一般社団法人バックアップセンタージャパン
- 郵便貯金口座 …… 記号 11210　番号 5100981
  口 座 名 …… シャ）バックアップセンタージャパン

- バックアップセンタージャパン HP …… http://www.backup-japan.org/
- バックアップセンタージャパン facebook … https://www.facebook.com/BackupCenterJapan
- 寄付サイト Just Giving Japan …… http://justgiving.jp/c/7826

特集Ⅱ

―縁〈ENISHI〉―
東日本大震災 仏像奉納プロジェクト

3月11日、東北地方における大震災で多くの尊い命が失われました。命を長らえた方も、計り知れない悲しみと、苦しみの中に在ります。『亡くなられた御魂を弔い、多くの方が祈りを捧げられる仏像を奉納したい。』

加藤魏山

撮影：笠原美恵

現在、彫刻家の加藤魏山さんは、仏師の三浦耀山さんとともに仏像を彫刻し、被災地に奉納する活動を「縁〈ENISHI〉プロジェクト」としてすすめている。

「地震直後は、悲観にくれていました。何ができるのか考えるばかりで、平常心ではいられなかった。でもやっぱり、彫ることしかないと思ったんです」。

加藤さんは20代前半で社寺彫刻に出会い、学びはじめた。その後、仏師に弟子入りし、修行を重ね独立。いまは仏像のほか、日本の古典や歴史を題材とした作品を制作している。

「亡くなった魂の鎮魂となるような、悲しみのなかにいる人の心に寄り添えるようなモニュメントを、被災地に届けたい」。2011年7月に、twitterで協力をよびかけた。やがて活動に賛同する人が現れ、薬師寺執事 大谷徹奘師を介し、一体目の仏像の奉納先が決まった。岩手県大槌町の『江岸寺』に、本尊として『釈迦如来坐像』を奉納することになったのだ。

「12月初旬に初めて、大槌町に行きました。がれきは片づけられていて、ただただ静かでした。何もなくなってしまったということを強く感じましたね」。これからどうしようという不安、言葉にならない想いを、皆抱えている。だからこそ、心静かに、手を合わせることができる仏様

奉納への想いを語りながら、加藤さんはそっと鑿に手を伸ばす。その手元には、柔らかく太陽の光が射し込んでいた。　撮影：笠原美恵

右／津波と激しい火災により、損傷が激しい地蔵菩薩。
左／瓦礫の中から拾い上げられた仏像と、鐘楼（しょうろう）の鐘。
Photo by Junichi Takahashi

下／これまでに習得した技術や経験を活かし、仏像奉納への意欲を語る加藤魏山さん。
撮影：笠原美恵

が必要とされているということも、改めて実感した。

縁があった人たちに仏像を届ける、その一歩として2012年3月11日に結縁法要を行う。

「現実的に彫るのは、自分と三浦さんの2人だけれど、関わってくれた人みんなの想いがのっかっていくものだと思っています。逆にいうと、それがなければ出来上がらない。自分たちがみんなの想いを集めて千羽鶴をつくるように、仏像をつくっていきたいんです。」

被災地のことを想っている、忘れませんという気持ちを伝えながらすすめていきたいという加藤さん。2、3年後には江岸寺で、彼らの奉納した仏像に手を合わせる人々の姿が見られるだろう。（編集部・井尻貴子）

加藤魏山 *Kato Gizan*
1968年東京、両国生まれ。埼玉県白岡町在住。高村光雲の流れを汲む仏師・岩松拾文師の下で修業を重ね独立。仏像の他、日本の古典や歴史を題材とした作品を制作。2004年日展入選。09年「木彫三人展」（日本橋三越本店）、「一技と和み一木彫秀作五人展」（大阪タカシマヤ）。日本橋三越、大阪、名古屋タカシマヤを中心に発表の他、寺院に納める仏像を謹刻。12年、大阪タカシマヤにて個展予定。現在、仏師・三浦耀山ら若手彫家・仏師とともに、被災地への仏像奉納支援を行う「縁〈ENISHI〉プロジェクト」をすすめている。

Information

一縁〈ENISHI〉一東日本大震災仏像奉納プロジェクトでは仏像の奉納に向け、現在、支援を呼び掛けています。寄付は造仏の経費に充てられます。

butuzohono project

- 一口 1,000円より　＊振込手数料が別途掛かります。
- 寄付金の振込先
  振込口座　みずほ銀行　春日部支店　普通）1224338
  口 座 名　仏像奉納プロジェクト
- お問い合わせ先　Email／butuzohono@gmail.com
- 縁プロジェクトウェブサイト
  http://www.butuzohono.org
- Facebook 仏像奉納プロジェクトページ
  http://ja-jp.facebook.com/butuzohono
- Twitter／@butuzohono_tag

たちはらけいこのイラストワーク②

うららかな　ひるさがり
こもれびの　レースが　ゆれて

すやすや　ねむる　あなたは
どんな　ゆめを　みているのでしょう

しあわせな　ゆめだと　いいな
めがさめたら　みんなに　はなしたくなるような

だけどもし
こわいゆめを　みたとしても

だいじょうぶ

ぎゅっと　だきしめて
あなたが　もういいって　いうまで
そばにいて　あげるから

「ゆきひめ」
2008年/23×23cm/水彩、色鉛筆

立原 圭子　*Tachihara Keiko*

武蔵野美術大学短期大学部美術科卒業。2007年よりフリーのイラストレーターとして活動。主な仕事にカレンダーや年賀状素材集など。展示会や他ジャンル作家とのコラボレーション企画などを通じて活動の幅を広げる。絵本づくりはライフワークと決め、こつこつと製作中。
作品サイト　http://k-coubou.sakura.ne.jp/

information

創作絵本「いっついのはね」、詩画集「物語の始まる日」を手製本版と電子書籍版で販売しております。

【手製本版取り扱い店】
・ポレポレ書舗（http://www.polepole-shoho.com/）
・syoca（http://syoca.jp/）

【電子書籍版URL】
・いっついのはね（http://p.booklog.jp/book/20707）
・物語の始まる日（http://p.booklog.jp/book/18741）

期待はずれの出来上がりにガックリする高橋と山崎氏（左）。

上：銅線と錆た鉄板。
左：銅線を曲げて、試し刷り。

僕と鉄

第四錆　錆びとプレス機

錆びの作品の制作は、自然や偶然と対話しながら、一人で黙々と、自分の持つコンセプトにそって表現していく。でもたまに、そういうコンセプトから離れて遊びながら制作することもある。そんなときは、作家仲間と一緒にいろいろと実験的に制作しながら遊ぶ。

先日、彫刻家の山崎りょう氏のアトリエに遊びに行った。秦野市の鶴巻温泉にある彼のアトリエに着いたのは、お昼頃だった。山崎氏の特製カレーを、彼の奥さんで色鉛筆画家の大竹恵子さんと3人で食べた。食事をしながら僕らは、今年予定している展示の話や、コンテンポラリーに活動しているアーティスト達やいろいろなギャラリーの話で盛り上がった。そのうちに、山崎氏のアトリエに下りて版画制作をしようということになった。

銅板もアルミ板も無かったので、鉄板をドライバーで引っ掻いて、ドライポイントに挑戦。版画プレス機にかけて、出てきた作品をみた僕と山崎氏は、「なんだこれ……」がっかりした。「もっと、即興的に出来る方が僕たちに向いている」と、山崎氏が銅線を持ってきて、呼吸の形を作りだす。それに、インクを着けて印刷すると、銅線のラインが色だけでなく、エンボス加工になって画用紙に写った。「これ

Voyage with the Iron

木板に金属をプレスしている二人。

銅線の版画がおもしろい。

高橋輝雄 *Takahashi Teruo*

「心も記憶も酸化する」をコンセプトに、鉄を雨で錆びさせた立体や平面作品を制作。また、呼吸と咳によるドローイング、白と黒の絵画も手がける。東京、ロンドン、トロントにて展示活動中。http://www.teruo-takahashi.jp

は面白い」と僕たちは暫く銅線の版画で遊んだ。銅線を即興的に造形する点と、プレス機を通した後に再びインクを着けたりするため、再度プレスする時には、銅線の形状が変化してしまうため、出来上がりは1枚1枚全て違う版画（全て1／1）という、あまり版画らしくないところが気に入った。

山崎氏は、アトリエの外をぐるぐるまわり採取してきた草木や革を試したり、木の板に金属片を乗せてプレスしたりしていた。僕は銅線の版画に、錆びを足してみたくなり、出来上がった版画面に錆びた鉄板をプレスした。錆びが作品の背景になり、錆びシリーズの一つになりそうな手応えを感じた。

この錆び版画シリーズは、早稲田のドラード ギャラリーでの個展で展示する予定だ（2012年5月25日から）。ドラード ギャラリーは、画家の小原聖史氏がオーナーをしているギャラリーで、前衛建築で有名な「ドラード和世陀」ビルの1階にある。小原氏とは、主に海外展や海外の作家仲間との関係でつながっていて、昨年のロンドンでの展示でも一緒に出展し、現地でカフェに行ったりして、数日を過ごしたこともある。

5月のドラード ギャラリーでの個展までには、まだ間があるので、山崎氏のアトリエにもう一度遊びにいって、面白い版画作品を制作してこようと思っているところだ。

上：画家の小原聖史氏がオーナーのドラード ギャラリーの覗き窓。
右：ドラード ギャラリーが入っている「ドラード和世陀」ビル。

さをりのまわり

香港徒然日記

第四話 新界 New Territory

「屏山文物徑」

イギリスの植民地になる以前の香港を垣間見たくて、中心街の喧騒を離れ、新界（New Territory）の天水圍（Tin Shui Wai）へ行ってきた。天水圍駅の南西部に位置する屏山（Ping Shan）は香港でもっとも古い集落のひとつで、「屏山文物徑（Ping Shan Heritage Trail）」として1～2時間で散策できるコースが整備されている。

駅前には「聚星楼」という、香港に現存する塔の中でもっとも古い塔がある。鄧族第七代世祖の鄧通彦が一族の子弟たちの科挙（中国の官僚登用試験）合格を祈願し、風水がよいこの地に建立したらしい。今も合格祈願に訪れる人がたくさんいるそうだが、六角形で3層造りのこの建物はたしかに縁起がよさそうだ。

聚星楼：魁星塔、または名文塔とも呼ばれる六角形の塔。今は3階までしか残っていないが、もともとは7重の塔だった。

コースを進むと200年ほど前に屏山坑頭村の鄧族が作った「上璋園」への入り口がある。ここは一般の方が今なお生活する住宅とのことで、当然中へ入ることはできなかった。

香港中心街ではまず見ることのない低層住宅街の細く緩やかな坂をのぼると、小高い丘の上にこの辺りの6つの村の諸侯を奉る廟のひとつ「楊侯古廟」が現れる。香港には珍しく寒い日だったが、濃いピンクのブーゲンビリアが満開のこの丘は明るく、少しだけ暖かく感じられた。200年以上前からこの辺りの住人の大切な水源だったという古い井戸（現在は使用されていない）や、屏山の鄧一族の祖先を奉っている「鄧氏宗祠」、学校として使われていた「愈喬二公祠」、科挙を目指す子供たちの私塾として造られた「覲廷書室」、宿泊施設、休憩場所として外部からの訪問客を迎える場所だった「清暑軒」など

もりあきこ
「さをり織り」という現代手織りで自己表現、ものづくりをする。2008年から日常の気づきを織る「日記織り」に取り組む。2009年、夫の香港勤務を機に日本と香港を行き来する生活がはじまる。
http://akiko-mori-top.blogspot.com/

語り上ア酔生

四杯目

ワインの危機と復活

世界中で楽しまれているワイン。
紀元前4世紀ころのシュメール人の遺跡から……とか
ローマ皇帝ジュリアス・シーザーが……とか
『5大シャトー』とは……
とかいった話は置いておいて、主流であるヨーロッパや人気の高いカリフォルニアのワインが過去に壊滅的な被害にあったはなし。

1870年ころ、研究のためヨーロッパにアメリカ原産の葡萄の木の苗が持ち込まれた。結果その葡萄の品種はワインには向いていなかったのだが、当時は検疫などがされていなかったため分からなかったが、とんでもないものが付いていた。

『フィロキセラ』 和名：ぶどう根アブラムシ
アメリカ原産。葡萄の木の根につき、木を枯らす害虫。

が迷路のような住宅街の中に紛れるように残っていた。独特のカーブのある古い瓦屋根、青いレンガ、細かい彫刻のあるタイル、カラフルで細工の美しい窓飾り、壁に描かれた華やかな動物や花の絵、文字。おおらかで繊細。何よりも今もここで生活する人がいて、生活の一部として受け継がれている。ずっとそこにあるという安定感が心地よかった。

以前香港のテキスタイルデザイナーが京都に染めや織りの技術を学びに来ていたので、そもそも中国の方からこういう技術って伝わってきたのでは?と聞くと「中国は何百年かごとに政策として古いものを全て取り壊してしまっていて、そのときに伝統技術も一緒に無くなってしまうんだ」と、とても残念そうに話していたことを思い出す。

さをり織りはまだ40年そこそこの歴史しかないが、広がるとともに様々なかたちが現れ、変化していく。変化することはある意味健全なのだと思うが、城みさをが説く「誰かがつくったものの上をなぞるのではない、それぞれの先天的感性を引き出す織りなのだ」という部分だけは変わらずに伝わってほしいと思う。すでにすぐ近くには高層マンションが建っている。あと数年もしたらここの景色も変わってしまうのかもしれない。

その日は旧正月で、近くで爆竹をならしている人たちがいた。ものすごい爆音と共に煙が立った。

右上／楊侯古廟
右中／鄧氏宗祠　「鄧氏宗祠」赤い提灯は旧正月の飾りだ。
上・右下／「屏山文物徑」の街並

それまでヨーロッパには存在していなかったためヨーロッパの葡萄の木にはフィロキセラに対する免疫がなかった。そのため、一気にヨーロッパ中にフィロキセラの被害が広まってしまった。

さらにほぼ同時期に『うどんこ病』『ベトカビ病』といった疫病までが発生してしまった。

これにより、日本酒の三倍増醸酒のようなワインが生まれたため法律で厳しく制限した。

また、アメリカの有名なワインの産地であるカリフォルニアでは、ヨーロッパ産の葡萄の木を使ってワインを造っていたのだが、そのためアメリカ産のフィロキセラをヨーロッパから逆輸入という結果に。ここでも大変な被害が出た。

後に、アメリカ原産のフィロキセラに免疫を持つ葡萄の木にヨーロッパ産の葡萄の木の枝を接木することにより解決した。

現在、世界中（一部除く）でこの方法によりワインが作られているが、フィロキセラの被害前に作られたワインは『ブレ・フィロキセラ』と呼ばれ珍重されている。

酔生 *Sui Sei*
酒飲んだり・料理したり・印鑑彫ったり・酒飲んだり・イラスト描いたり・映画見たり・仕事したり・酒に飲まれたり・本を読んだり・モンスターをハントしたり・酒飲んだりしながら日々過ごしております。

第3話

アートと
ふたりの生活

浅野純人×浅野香保里

アートに携わるカップルの暮らしを紹介する本コーナー。第3回目は、絵画作品の制作、アーティストグループ「第0研究室」の主宰、絵画教室「あーと屋図工室」の代表、さらに高校の美術講師と、いろいろな立場からアートに関わる浅野純人さんと、絵画教室講師の浅野香保里さん。アートや制作に対する基本的な考え方が似ているというおふたりに話を伺った。

あーと屋 図工室
zukousitu
http://zukousitu.s1.bindsite.jp/

浅野夫妻が運営する「あーと屋図工室」こどもクラスの授業風景。この日は凧の制作。

「教えている子どもたちには、（絵を描いたり、何かを作ったりするとき）自分を出すのは恥ずかしくない、楽しいっていう気持ちを忘れないで成長してほしいなって思う」という浅野香保里さんと、「アートを学ぶ場には、誉めるということがとても大事」という浅野純人さん。

取手アートプロジェクトの一環として行われた壁画のプロジェクトで出会った2人は、遠距離恋愛を経て結婚。現在、取手で絵画教室「あーと屋図工室」を運営している。

「2人で一緒に教室やワークショップをすることが多いので、そういうときはお互いフォローできて助かっています」。「ふだんも、よく教室のことについて話します。いつも一緒にいますから、いつでも意見交換ができる。テレビを見ていても、これ、教室でできるんじゃないの？とかね」。

純人さんは、高校でも美術を教えている。「小さい頃から教員になりたかったんです。大学院を出てからすぐに高校の美術の非常勤をはじめて、いまも続けています。非常勤ですが、週5日は学校に行ってますね。授業数は、1週間26コマ。美術の先生が1人しかいないんですよ。予算やカリキュラムもすべて自分で組んでいます。」

香保里さんも、高校時代の夢は美術の先生だった。「大学生のときから付き合っていたので、卒業したら取手でやっている教室とかワークショップを手伝うんだって思っていました。だから、いま美術教室の先生をしているのは自然な流れですね」。

東京藝術大学大学院生の頃から、取手市内でアートプロジェクトの企画や、まちづくり系のNPOと共同でのポックスギャラリーの運営などを行っていた純人さんは、そこで出会った人のデッサンを教えてほしいという声に応え教室をはじめた。現在こどもクラス、デッサンクラス、水彩クラスの3クラスを開講しており、こどもから大人まで幅広い年齢層

浅野夫妻。あーと屋図工室にて。

ホームページ　http://zukousitu.s1.bindsite.jp/

浅野純人「エンギモンポップス」 2011年
キャンバスにミクストメディア（アクリル、ペン 他）
昨年3月の個展用に制作した作品で、日本の縁起物をモチーフにしている。（浅野純人）

右／浅野純人　2011年　板にミクストメディア（アクリル、ペン 他）
左／浅野純人　2011年　キャンバスにミクストメディア（アクリル、ペン 他）

浅野純人 *Asano Sumito*

1979年福岡県福岡市生まれ。多摩美術大学美術学部絵画学科油画専攻卒業。東京藝術大学大学院美術研究科壁画専攻修了。現在、アーティストグループ「第0研究室」主宰。「あーと屋図工室」代表。高校美術非常勤講師。趣味は手ぬぐいコレクションとバスケ。
浅野純人ホームページ　http://asanosumito.info/

の生徒が通っている。

教える／学ぶ場で大切にしていること

アートを教えるということについて「幅広くものを知っていることが大事かなと思う」と純人さんは言う。「月並みな言い方ですけど、絵画には答えはない。だから、こういう表現もあって、こういう表現もあって、それぞれにいいところがあるよっていうのを、先生は評価してあげないといけない。生徒にとって、先生に色がいいって言われたという感じ、誉められたという感覚は重要だと思っています。

学校では、もっと勉強しろと言われることはあっても、先生に褒められることはあまりないという子が多い。そういう子たちが、美術の時間に、先生という肩書がついた人から誉められると、笑顔になることがある。それは、学校に来るということの動機付けにはなる。ともすれば、何かほかのこともがんばってみよう

上、右上、右下／浅野香保里「ドローイング」
2011年　紙にアクリル、ペン、クレヨン

浅野香保里 *Asano Kahori*

1986年茨城県龍ヶ崎市生まれ。茨城県立取手松陽高校美術科卒業。愛知県立芸術大学美術学部美術学科油画専攻卒業。現在、「あーと屋図工室」講師として「「あーと」を今よりちょっとだけ身近なものに」をテーマに活動している。趣味は料理、編み物、まんが。

こどもクラスでは４歳から11歳の子供たちが通い、一緒に楽しみながら描く。

かなって思ってくれることもある。僕は、他の教科に比べて、美術は誉める切り口がいくらでもあると思うんです。でも、知識がなかったら、誉めることはできません。ただいいって言ったって、本人は、納得していなかったら聞いてきますからね。どこがいいんだって。そうしたときに、たとえば教科書を見せて、ほら、お前のこの色と似てるよねって根拠を示してあげると、その誉められたことも受け入れてもらえるし、もうちょっとやってみようかなっていう気にもなってもらえる。

誉めるっていうことが、アートを学ぶっていう場にはすごく大事で、教える者としてはその誉めるための知識を蓄えておくことがすごく大事だと僕は思います。」

香保里さんも、大事にしている部分は似ているという。「小さい頃は楽しくお絵描きしていたはずなのに、小学生、中学生くらいになって、自分を表現することしたいが恥ずかしくなったり、作品をつくったとしても、それに点数をつけられたり、人と比べられたりすることで苦手になってしまう人が多いと思います。でも私は、そうやって苦手になっちゃうことがすごく残念だし、もったいないなと思う。だから、こどもには、その楽しいっていう気持ちを忘れないでほしいし、大人には、もういちど取り戻してほしいなっていう思いがありますね。描くのは好きだけど、下手だから、恥ずかしいから見せたくないっていう人もいます。けれどそんなこと気にしないで、楽しく描いてほしいなって思っているんです。講師としては、知識や技術を教えることよりも、誉めて、楽しい気持ちで描いてもらうことがいちばん大切だと思っています」。

自分らしく、マイペースで

アートや制作に対するスタンスも、人それぞれでいい。「アーティストって一口にいうと、作家で食べていける人、世界で活躍できる人っていうイメージがあるし、もちろん、これから美大を目指している人は、そういう目標を持った人もいると思います。でも、そうじゃない生き方もあるんじゃないかな」。

高校の美術科に通っていた香保里さんは、3年生の頃、周囲とのギャップに悩んだという。「絵を描くことに対してやる気がでない時期がありました。みんな美大を目指して、夜遅くまで学校に残って制作を頑張っているのに、それができなくて。でも、当時の美術の先生に、『あなたはそれでいいんじゃない？』って言われたんです。何気ない言葉だったけど、すごく助かったんですよね。そんなに、がつがつぎらぎら、がんばらなくてもいいんだって思って。自分らしくマイペースでいいんだよっていうことに助けられた。

美大生になってから、作家として一生やっていくという感じではないなって思ったときも、私はこれでいいんだと思えた。そのときの先生の励ましに、ずっと助けられています」。

そんな香保里さんに、これからアーティストを目指す人へ伝えたいことを尋ねると「うーん。きっとツライ思いをしたり、挫折をしたりすることもあると思うんだけど、そこで完全に何かを諦めたりとか、自分を責めたりしないで、自分のスタイル、自分の生き方で、楽しくアートをやってほしいな」。

それに加えて「幅広い視野をもつことを大切にしてほしい」と純人さん。「美術をやるっていうことで、美術だけの勉強をするっていうのは大間違いで、いろんなところに目を向けて、日常生活でもアンテナをはって、吸収して、制作活動に活かせるようにしてほしいですね。美術は、生活のすみずみにまで行きわたっている分野だと思いますから」。

自分のスタイルを大切にしながら、アートに関わるお2人。「僕は、制作もやめずに続けたいと思っています。ハイペースで、第一線をどーんて行く人もいるんだけど、僕はそうじゃないんですよ。でもエンジンをストップするんじゃなくて、常にアイドリングはしておきたい。気長に、ずーっと続けたい。」

「私も今年はもうちょっと絵を描きたいなと思っています。教室のほうは、まだ講師の経験も短いですし、がんばるべきところがたくさんあります」。だから、2人でお互いに、フォローしつつ、学びあいつつすすんでいきたいという香保里さん。

ストイックに自分の表現を追求して、絵を描くというより、ワークショップや教室を通じて人と触れあうことが好きだというおふたりは、自身の作品だけでなく、関わる人々にとっての「楽しい時間」を日々作りだしているのだと思う。

（編集部・井尻貴子）

写真提供／あーと屋図工室

ネジ立体製作所

古田紀彦

第3回 日常の中から

エリトア一周年おめでとうございます！ネジ立体製作所所長古田です。今回の作品はゴルファーとキャディーです。この作品の主な部品はナットで出来ています。当時私がゴルフ初心者だったのですが自分のスイングを部屋でやりながら作ったものですから今見ると結構ヒドイかも（笑）今だったらもう少しは良いスイングの作品になっているのでは…!?

私は作品を作る時に心掛けている事があります。自分の身近にある日常の中から物・形・動作・経験・閃きなどを作品に取り入れて行こうと思います。

古田紀彦
Furuta Norihiko

1973年埼玉県川口市出身。堀口自動車整備工場勤務。高校卒業後自動車整備士になりネジと共に20年。2009年3月ワークショップにて初制作。2010年9月ネジ立体製作所開設、所長となる。これからも身近にあるネジたちに愛情をこめ命を吹き込みつづける。

「ネジ立体製作所」ロゴデザイン：島谷美紗子

◎主な配布先（地域別50音順）

○埼玉県
【さいたま市】ギャラリー健

○神奈川県
【鎌倉市】syoca

○千葉県
【千葉市】画廊　椿

○東京都／23区
【中央区銀座】Oギャラリー／画廊るたん／ギャルリー志門【中央区京橋】ギャラリー椿／ギャラリーなつか【荒川区】ギャラリー滴庵（南千住）【江東区】楽庵（清澄）【渋谷区】Only フリーペーパー（渋谷）／手織適塾さをり（代々木）【新宿区】artdish（矢来町）／えすぱすミラボオ（神楽坂）／ギャラリー絵夢（新宿）／gallery 坂（築地町）【杉並区】GALLERY ノラや（高円寺）／ギャラリィ遊（高円寺南）／古道具権ノ助（高円寺）【世田谷区】現代HEIGHTS（北沢）【千代田区】ギャラリーf分の1（神田）／文房堂ギャラリー（神田）／OnE drop cafe（神田）／アーツ千代田３３３１（外神田）／ギャラリーUG（東神田）／馬喰町ART+EAT（東神田）【豊島区】atelier bemstar（池袋）【港区】Pinpoint Gallery（南青山）

○東京都／多摩地域
【国立市】ギャラリーモンド／ギャラリーゆりの木【国分寺市】café slow／switch point【武蔵野市吉祥寺】アート吉祥寺／Café & Galeria PARADA／Gallery 惺 SATORU／ベルベット吉祥寺店

○大阪府
【大阪市】Calo Bookshop & Cafe

○兵庫県
【神戸市】ポレポレ書舗

○長野県
【飯田市】アートハウス【佐久市】ネモファニチャー
【塩尻市】塩尻市立図書館

※前号で古道具権ノ助（杉並区高円寺）の表記に一部誤りがありました。お詫びして訂正致します。

※配布先の詳細はホームページをご覧ください。
エリトアホームページ　http://www.eritoa.com/

【編集後記】

「こんな風に笑ってたのね。一番しんどかった頃なのにね」。今号の表紙を飾る素敵な笑顔の写真。それを初めて見た時の女将の言葉を語るたかはし氏の声は、少し震えていたように思います。氏のカメラに向けられた、人びとの素敵な笑顔。その笑顔に秘められた記憶。そしてそれを乗り越えようとする強さと勇気に、只々感じ入るばかりです。

2012年3月　吉野章

◎お知らせ
今号の「Front Face」は休載いたします。

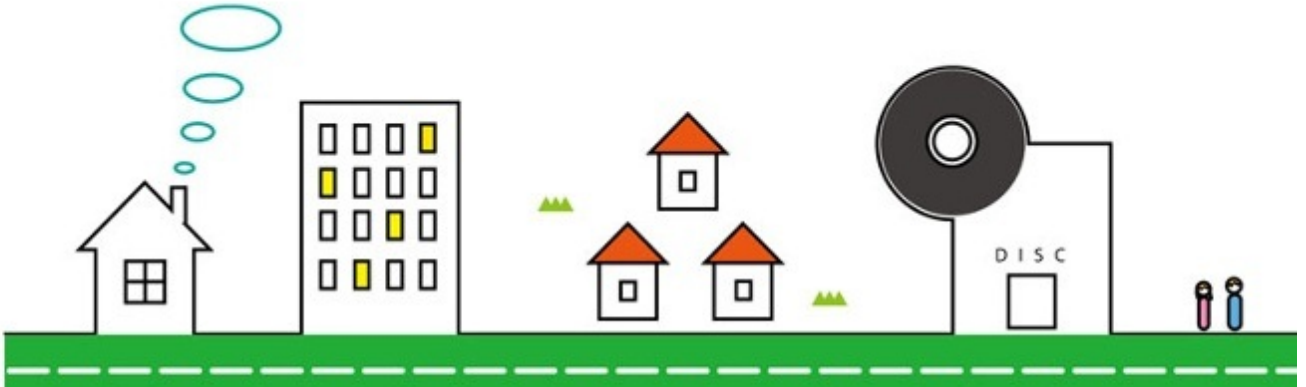
◎エリトアでは宣伝・広告を募集しています。
◎設置をご希望の方は別途ご案内をいたします。
◎本誌へのお問合せ等は編集部まで、お気軽にご相談ください。
◎エリトア編集部
eritoa@mail.goo.ne.jp

編集・発行人／木村和弘
編　集／井尻貴子
　　笠原美恵
ロゴデザイン／高瀬きぼりお
本文レイアウト／吉野章

『エリトア』
第4号 2012春
2012年3月15日発行
エリトア編集部 〒350－1101 埼玉県川越市大字的場2835－5－201 http://www.eritoa.com/ E-mail eritoa@mail.goo.ne.jp
編集・発行人／木村和弘
◎本誌掲載の文章、写真、イラストなどの無断転載・複製（コピー）は禁じられております。

暮らしの中に星印をみつける。

*inulloop group
イヌループグループ



http://inulloop.com

Gallery And Cafe
・atelier bemstar（池袋）
・moguRa 食堂（鎌倉）
・北鎌倉小舎ギャラリー（鎌倉）

小道具・アート作品の販売
・KURASU

池袋、鎌倉店舗にて作品の展示会をされたい方を募集しています。